

学生海外調査研究	
英国海軍と女たち：大戦間期の英国伝記文学の人種の（再）生産と伝記	
松永 典子	比較社会文化学専攻
期間	2008年11月20日～11月30日
場所	英国
施設	帝国戦争博物館（Imperial War Museum）、王立海軍博物館（Royal Maritime Museum）、大英図書館（British Library）

本海外調査研究では、第一次世界大戦に設立された英国海軍女性部隊（Women's Royal Naval Service、以下WRNSと略）の資料調査をおこなった。具体的には、平成20年11月20日から30日にかけての9日間に、英国の王立海軍博物館（Royal Naval Museum）、帝国戦争博物館（Imperial War Museum）、大英図書館（British Library）の三カ所にて資料の閲覧と調査収集を実施した。

本調査研究は、報告者が現在執筆に取り組んでいる、博士号学位論文「大戦間期における英国伝記文学」（仮題）の、とくに第5章の完成のためにおこなわれた調査である。本調査の目的を明らかにするために、まずこれまでの本調査研究の背景を説明する。

#### ■調査研究の背景

報告者の博士論文では第一次大戦以後・第二次大戦開戦までの大戦間期に書かれた英国伝記文学について論考し、植民地支配の終焉を迎えようとする大英帝国の市民（再）形成における伝記の役割を考察する予定である。前線および銃後での戦争体験をもとに執筆された戦争伝記文学から、20世紀初頭に大きく変化を遂げる英国の市民像の変遷を考察し、さらには戦争言説がどのように構築されるのかという問題を探ることで、戦争という暴力の連鎖の構造を明らかにしたいと考えている。この時代を一連の時間軸でとらえることによって新たな文学的視点が得られると考えているので、研究対象の時代区分を従来の英文学史の枠組みのように、1920年代をハイ・モダニズム、30年代をオーデン・グループらの反戦詩人の時代として区分するのではなく、第一次大戦以降、第二次大戦以前までを大戦が連鎖した時代「大戦間期」として捉えた考察を進めている。未曾有の死者を出した大戦後は、大戦に参

戦した各国で伝記に関する関心が高く、出版物も相当に多かったが、従来のモダニズム文学という研究区分では韻文、散文、技術革新によって発展した視覚芸術に議論が集中し、伝記が十分に研究されてきたとは言い難い。しかし近年になってこうした傾向に変化が起きている。たとえば、2004年に出版されたローラ・マーカスおよびピーター・ニコルズが編さんした『ケンブリッジ20世紀英文学史』においても、「伝記」に関する章が割かれている<sup>1</sup>、また2007年にはロンドン大学キングス・カレッジには伝記・記録文学を研究するライフ・ライティング・センターが設立された。さらに同センター長に就任したマックス・サンダースの専門が大戦間期の伝記文学であることから、近年の英国文学研究における大戦間期の伝記文学の重要性が増してきたことが伺える<sup>2</sup>。同時にこうした伝記に対する関心の高まりは、英文学研究においてさらなる伝記研究の精緻化が求められていることも示しているだろう。

大戦間期の伝記文学を論じるさいに報告者が有用と考える分析軸が、人種および性である。まず人種問題は、大英帝国が大戦という国家行事をむかえたときに、とくに重要な要素となった。第一次大戦に従軍した大量の戦死体は、国家に奉仕した身体すなわち「市民」および「国民」の姿として表される。こうして戦争がもたらした大量殺戮は、作家（伝記作家）に戦死体という新たな対象（伝記モデル）を提供するが、同時に戦後の帝国に新たな労働問題を引きおこすことにもなった。それが20世紀初頭の英国湾港都市でおこった人種暴動事件である。帝国の遺産および英国国内の人種対立を船乗りから研究するローラ・タバリの研究によると、大戦中に欠如した労働力を補うために、大英帝国は植民地出身の労働者を求めた。戦後、この新

旧労働者の間に労働問題が起こり、それがもっとも顕在化した職業が船乗りたちである。20世紀前半における英国の船乗り業務従事者はおよそ20万人とされ、賃金・労働条件・人種的属性によって分類されるという。全体の約三分の二を占めるヨーロッパ出身者が最大集団で、なかにはスカンジナビア系もしくは北欧出身者もいたが、そのほとんどの者が英国出身であった。残りの三分の一を占めるのが、西アフリカ、東アフリカ、インド、カリブ、アラビア半島を出身とする「黒人」もしくは「有色人種」と呼ばれる下級労働者であった。彼らの多くは植民地帝国における「帝国臣民」だったが、雇用者にとって彼ら「黒人」船員は「白人」たちよりも低賃金で雇用できるのでかなりのニーズがあったという。こうした「異人種」雇用は、船主の要請を受けたもので、英国国内で労働者不足が問題となる第一大戦中よりも前の1849年航海法の法改正ですでに可能だった(Tabili 42-3)。しかし、大戦後は、国内労働市場の「保護」という名目で、こうした戦中に帝都に集まった「外部」の労働者を制度的に(再)排除していった。実際「英国人」船乗りたちからの抵抗も強かった。こうした排除の動きは当然のことながら、船員間の対立をうみ、湾港都市における暴動を多発させた。英国史研究者の木畑洋一は当時の一連の暴動のことを、帝国崩壊の過程において異人種を「英国人」概念から排除する最も顕著な動きの例として紹介している(259-62)。いわば大戦間期の船乗りたちは人種の区分に巻き込まれた最初の職業団体であった。こうした船乗りたちをめぐる人種問題は「1925年有色外国人船員命令」の導入によって、「有色人種」を船舶業から排除することをもって、ある種の決着をみる。本法のように人種を定義するという不可能を可能とする法が実行されたことからわかるように、大戦間期は「有色人種」もしくは「黒人」——および、その反対語として「白人」——の船員という新たな人種を確立させた時期でもあったのだ<sup>3</sup>。この意味で伝記作家たちが描いた新たな伝記対象は、必然的に人種を帯びていたと考えられる。

性についていうと、ホモセクシュアル・レズビアン・ヘテロセクシュアルなどの語が登場したのが19世紀末から20世紀初頭にかけてだという事実が示すように、当時は性科学の議論が盛んであった。当時の性科学の流行は、人種だけでなく性という属性をおびた身体分析が伝記には必要であることを示していると思われる。性科学、人種、伝記の関係の深さを示す例として、性科学の創始者ハヴェロック・エリスの「天才」に関する考察が挙げられる。この考察において彼

が『英国人名辞典』(1885-1901)を一次資料として用いていることから、当時の伝記研究者にとっての伝記(bio-graphy)とは、生物の学問すなわち生物学(bi-logy)であり、性科学や優生学の議論とも通底していたと考えられる。さらに第一次大戦前夜の英国においては、性のなかでも女という性が活発に活動した時代でもあった。彼女たちもまた、人種問題と無関係ではいらなかった。

20世紀初頭の英国において移民を規制する複数の法律が採択されているが、1914年の「英国国籍と外国人の地位に関する法」は、英国の女たちの地位を根本から揺るがせた。「英国臣民の妻は英国臣民とみなし、外国人の妻は外国人とみなされる」(Baldwin 522)と規定する本法は、当時の英国の女たちの市民としての法的地位が絶対的なものではなく、夫との関係のうえに成り立っていることを明らかにしている。本法の施行により、元来英国に生まれ、英国に育った人であっても、結婚相手(夫)が英国籍をもたない場合は、自動的に非英国臣民となる。つまり英国の女は「人間」として市民権を得たのではなく、英国臣民の「妻」として市民権を得たのである。英国の女たちの法的資格は他律的承認ゆえに、不安定なものでしかなく、また「英国の女」の地位も他律的な「英国市民」でしかなかった。1918年の改定では30才以上の女たちに、大戦間期の1928年の改定では21才以上の男女に等しく選挙法を与え、一般に1928年の改正をもって英国普通選挙の実現といわれる「国民代表法」だが、女たちの人種を限定したうえで成立した法と位置づけると、本法は当時の英国政府が求めた市民の人種と性の性質を規定した法であったことが明らかになる。つまりところ本法は普遍的に市民権を与えたというよりも、デフォルトとなるべき「普通」の市民像を限定した法と理解する方が妥当だろう。

#### ■本研究の目的

戦争に従軍せずに「異人種」と交わった湾港都市の女たちは「普遍的」英国市民像から排除されたが、それでは戦争にもっとコミットしたと考えられる女たちは——従軍経験をもつ女たち——どのような市民形成をおこなったのか。これがこれまでに報告者が研究してきた、商業船の船乗りとその妻をめぐる人種暴動について研究の成果によって得た研究課題であり、この問いを追求するために企画されたのが今回の調査研究である。具体的に調査対象としたのは、第一世界大戦中に設立された英国海軍女性部隊(WRNS)とその設立に貢献した関係者の伝記およびその表象である。

調査対象をとくに海軍女性部隊に焦点化したのは、その初代長官キャサリン・ファースが救急看護奉仕隊（Voluntary Aid Detachment, VAD）およびWRNSの洗練に協力した事実に注目したからである。女たちの従軍経験は海軍に限ったことではなく、大戦中には陸軍（Queen Mary's Army Auxiliary Corps）にも空軍（Women's Royal Air Force）にも女性部隊が設立されている。しかし海軍の女性部隊の設立は1916年と、両者（陸軍1917年、空軍1918年）に先駆けていることから、後者の二つは海軍の女性部隊の導入成功に従って設立されたことが予測される。その点において海軍女性部隊は他の二つよりも重要と考えられる。さらに七つの海を支配すると呼ばれた大英帝国にとって軍事的にも象徴的な意味でも重要な役割を担うことから「先任軍」と呼ばれるほどで、形式の上だけとはいえ英国軍において陸軍、空軍の上位に位置づけられる海軍女性部隊の設立にファースが関わることができたのは、VADを陸軍の管理下に移行させた「功労」を認められたからであろう。WRNSとその設立に関与した人物を研究することで、女の従軍と女による軍事組織との関連から、大戦間期に再形成された市民としての女の伝記研究に新たな視点を導入できるのではないかと考えた。

#### ■調査研究の場所

こうしたテーマを調査するのに選択されたのが、英国ロンドンにある帝国戦争博物館である。同博物館は、第一次世界大戦を資料調査する者ならば必ず訪れる重要な資料館である。大戦中の1917年に建てられた本館の設立目的は大戦に関する資料を収集し、展示するためであった。また第二次大戦中にそのコレクションをわざわざ疎開させた事実からも分かるように、第一次大戦以降に英国が関与した戦争について永続的に記録収集し展示することが、本館の大きな機能となっている<sup>4</sup>。博物館のコレクションはおもに美術関係、記録文書、書籍（定期刊行物含）、展示物、映像資料、写真資料、音声資料に分かれているが、従軍経験者と軍部との関係を知ること、表象分析とを目的とした今回の調査の場合は、美術資料と写真資料にてポスターや写真を調査し、書籍部門にて定期購読者対象の雑誌（非一般誌）を調査する予定をたてた。

さらにWRNSについて詳細な調査をおこなうために、WRNSの関係者の書簡やWRNS設立準備資料を所蔵する英国ポーツマスにある王立海軍博物館で調査をおこなった。ポーツマスは軍港都市として知られており、同博物館に展示される歴代の軍艦や展示物から

も英国海軍史を学ぶことが出来たが、なかでも重要だったのが海軍に関する資料調査である。こうした資料は日本で入手不可能な貴重資料であるだけでなく、WRNSの歴史を知る上で有益な記録でもあった。また日本では専門家が少ない分野でもあるので、同館のキュレーターに直接質問する機会を得たことも、報告者にとっては貴重な機会となった。

上記の二つの博物館はおもに美術資料、記録資料、書籍雑誌を閲覧収集することを目的としたが、大英図書館ではこれらの資料を理解するために必要な研究書をおもに閲覧し、必要箇所を複製した。美術資料・記録資料と等しく博士論文執筆のためには必読となる研究書は、国内でも入手可能なものもあるが、国内各地の図書館に分散されており、一度に多種多様の書籍を閲覧できる本図書館は非常に有益だと考えられた。

#### ■今回の調査研究の成果と意義

WRNSとその関係者に研究対象を絞った今回の海外調査の成果はおもに二点ある。第一に戦中の英国報道において従軍した女たちは表象として重要な役割を担っていたことが記録から明らかになったこと、第二に研究が進んでいない英国軍における女性部隊の役割を、その導入に深く関わった人物から手懸かりを得ることができたことの二点である。以下にそれぞれの成果について説明する。

第一には従軍した女たちの写真記録および大戦後のWRNSメンバーの証言から、彼女たちの表象が戦中だけでなく、大戦間期も重要であったことが明らかになった。日本国内で調査した限りにおいては、第一次大戦全般を論じた書物に多数使われていたのは男たちの写真で、女たちの姿は兵器工場での労働もしくは看護婦の職業に限られているように思われた。しかし今回の調査によってガスマスクの使用・隊列行進・拳銃など実践的訓練をWRNSのメンバーがおこなっていたこと、また彼女たちが海外にも派兵されていたこと、戦中の死者もいたことなどが明らかになり、女たちもまた軍備をしていたことが明らかになった。また政府は写真として記録することに積極的で、お抱えの写真家を雇用して記録保存しており、そのなかには女たちの従軍の様子がしっかり残されていたことを確認した。さらにWRNSの公式解散にもかかわらず、退役軍人として停戦記念日の式典に彼女たちが戦後も毎年列席し、花輪の贈呈など視覚的に目立った役割を担っていたことも、定期刊行物の資料調査から明らかになった。

こうした英国軍における女たちの役割を明らかにす

る資料を入手したことが第二の成果であるが、それは第一大戦に直接もしくは間接的に関係した女たちの声を理解するうえで重要な資料となる。とくに今回の調査では当時の女たちの歴史的教育的背景には共通点があることが資料から明らかになった。大戦に従軍し、伝記を執筆した女は少なくない。たとえばVADに参加した者もあれば、看護婦として従事した者、また米国籍ながら英国軍に従軍した人物もいる。さまざまな階級、階層、国籍、主張を持つ女たちがさまざまな戦争の記録や回想を残しているが、彼女たちの多くに共通するのは女性運動となんらかの形で関わっていたという点である。今回の調査では、少なくとも海軍女性部隊設立関係者たちの多くもまたフェミニスト運動に積極的であり、フェミニストとしての自覚を持っていたらしいことが資料から明らかになった。こうしたフェミニスト運動の主張を多面的に捉えることに成功したという点でも今回の調査は有益であった。

今回の海外調査によって得られた成果は「英国海軍と女たち」（仮題）として学術誌に投稿する予定である。そこでは今回調査した海軍女性部隊に関する資料を提示し、従軍を経験した女たちによって書かれた伝記から、英国市民形成の理論的考察をさらに深めたいと考えている。その後本論文を学位論文のなかに組み込むというかたちで、本海外調査研究の成果としたと考えている。さらに今回の調査は、日本の女たちの戦争体験の考察を視野に入れるという将来の課題が明確になった点でも意義深いものであった。

#### 引用文献

Baldwin, M. Page. "Subject to Empire: Married Women and the British Nationality and Status of Aliens Act." *Journal of British Studies* 40 (2001) : 522-56.

Mason, Ursula Stuart. *Britannia's Daughters: The Story of the WRNS*. London: Leo Cooper, 1992.

Smith, Harold L. *British Feminism in the Twentieth Century*. London: Edward Elgar, 1990.

Tabili, Laura. "We Ask for British Justice". Ithaca: Cornell UP, 1994.

The Trustees of the Imperial War Museum 2000. *Imperial War Museum London*. London: Imperial War Museum London, 2005.

木畑洋一『支配の代償』、東京：東京大学出版会、1987年。

#### 注

1 Laura Marcus and Peter Nicholls ed. *The Cambridge History of Twentieth-Century English Literature* (Cambridge: Cambridge University Press, 2004) のなかのとくにMax Saunders "Biography and Autobiography" pp. 286-303を参照。

2 ロンドン大学キングス・カレッジ、ライフ・ライティング・センターが扱うテキストは多岐にわたり、伝記や自伝のみならず書簡、回想録、肖像画を中心とする映像美術、韻文、事例史をふくむ医療における語りすらも含むとしている。詳細は、Saundersの同センターへの就任演説 "Autobiografiction: How the Edwardian Stephen Reynolds Identified a New Genre among the Experiments of His Time." *TLS*. (October 3, 2008) を参照。

3 人種に関する生物学的謬見については、George W. Stocking, *Victorian Anthropology*. (New York: Free Press, 1987) のpp.106-7とpp.228-29およびNancy Stepan, *The Idea of Race in Science : Great Britain 1800-1960* (London: Macmillan in association with St Antony's College, Oxford, 1982) を参照。

4 帝国戦争博物館に関するパンフレット *Imperial War Museum London* (London: Imperial War Museum London) 参照。

まつなが のりこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 比較社会文化学専攻

#### 【指導教員のコメント】

伝記研究に人種と性という観点を導入し、伝記を市民としてのありようを再定義するツールとして読み直すという博士論文の基本的構想に基づき、今回の資料調査ではイギリス女性海軍軍人の伝記を対象として取り上げたが、まず、テーマとの関連が深く、資料がそろいやすく、しかも限定が容易な対象選択が秀逸である。3つの図書館の選定、および、そこで閲覧すべき資料の選択も的確であり、効率的かつ有意義な資料収集がなされたと思像される。松永さんはすでに持ち帰った資料の読解に着手しているが、具体名の早すぎる公開によって不利益を蒙らないよう、本報告では、対象となる人物たちの氏名、著作名などの公表を控えさせた。分析結果が一日も早く（国際的に評価されやすい言語を用いて）学術誌に発表され、博士論文に結実することを期待している。

(お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 教授 内田 正子)